



第7巻第12号
通巻第84号

IMAGINE!

想像と創造

(たまに偽造)

いつでもコストとの格闘である。建築の工事には、実に多くの職種がかかわっている。工事の種類ごとの費用はそんなに大きなものではない。鉄筋を減らして耐震強度を半分にしたとしても、節約できる工事はマンション一棟でせいぜい三百万円とかそんなものである。施主の利益を考えると分厚い見積書を目を皿のように見ている。これが職業倫理に基づいた、建築士のあるべき姿である。もちろん工務店に無理を強いることが目的ではないから、適正な金額になるように、ということである。設計図どおり建物が施工されているかどうか、工事の期間をおとして建築士がチェックする制度がある。これを現場監理という。安全管理などの「管理」と区別して、「監理」という。監という字が皿を部首にもつことから「さらかん」とよばれることもある。建築士は、「こどもものをしつかり見てチェックすることをその職能とするので

ある。施主のため、社会的倫理のためである。しかし、このようなチェックがひとたび建築士やその周囲の人間の利益のために行われると、なにひとつ幸福な結果を生むことはない。自明のことである。住宅は、いったいいつから買ったものになったのだろうか。一生に一度の買い物。車の上をゆく大きな買い物。この物件は、大変にお買い得です、などなど。新聞に、マンションや住宅の広告が入らない日はないし、先日、山の手線の車両がすべてマンションの広告でうまっていた。事件の影響があるのだろうか、車両がひとつの広告で独占されることはいままでもあつたけれど、ひとつの業種で独占されたのは、知るかぎりはじめてのことだ。「わたしたちは一致団結して言わなければならぬほど、建

(次面に続く)

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

冷え込みが激しいと、老化著しいエンジンにはなかなか火が入らない。キック百回。一々数えてやしないけれど、必ずしも誇張だとは言えない。寒い筈なのに、単純な動作を繰り返したお陰で、少しは身体が温まってきたりするのだから。こんなことも、ささやかな幸せなのかな。

寒風吹き荒ぶ中、単車を走らせる。七〇料で走っていたら、それはつまり、時速七〇料の寒風を真正面から浴びているのと同じことである。気象庁の基準なら颪風に相当する。厳しい冬に大した用事がある訳ではないのに、そんな移動方法を選択する私は偉いのか馬鹿なのか。

兎にも角にも、青梅街道を直走り、ガードを潜って新宿通り。みずほの前で単車を降りて、せかせかと歩くこと五〇米。未廣亭に到着と相成る。暖房の排出口に程近いところに腰を下ろす。もわもわと温風を直射され、普段なら逆上せかねないところだが、凍てついた身体にしてみれば、過剰暖房どんと来い。卒倒寸前の眩暈さえ、ささやかな幸せ。

遠路遙々足を運んだのは、昼の膝替わりのうめ吉が目当てである。ところが、何たるこ

とか、代演が入っていた。期待が大きければ、嗚呼、失望は一面でかい。落胆一人の私にとつて、代演の茶楽も、昼取りの小柳枝も余りにも無力であった。茫然の置き所がみつからぬまま、はつと気がつけば、夜の部の前座、二ツ目、苦手なびろきと続き、一体、私は此処で何をしているのだろうか、と自問する始末。帰ろう。うちへ帰ろう。

寒さと無念に震えながら、やつのことで長屋に辿り着くと、玄関ではか猫がにやにやあと出迎えてくれる。こんなことだつて、ささやかな幸せだと言えなくもない。

感謝の気持ちで、歓迎いただき有り難くない。と礼を述べたが、先方、泣き止む気配がない。何だい。貴公が待つておつたのは、私ではなく食べ物であったのか。つまり、御猫様に従順な二本足の生き物なら誰でも良かったのでございますか。はは、私なんざ、その程度の存在に過ぎませぬ。空腹が激しいのでありましような。にやあにやあにやあにやあと催促。喧しい。大変御立腹の御猫様の機嫌気候を取るべく、レトルトを開封して恭しく給仕させていただきます。むしゃむしゃ

(最終面に続く)

今日の紙面から

- 一面 ロンドンレポート)
お金に困らないように
- 二面 英語)
しつがある
- 四面 からすライブラリー)
CD・メスク・エリル



からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

(一面から続く)

設に対する不信は世間を覆っている。

対価を出して手に入れるのだから、いつの時代でも住宅は買うものであったことは間違えない。ちがうのは、住宅をつくることに意識をむけず、例えば百貨店などでハンドバッグを買うように手に入れるという感覚である。今回の事件は、さしずめこんな住宅市場のバーゲンセールの結果といふことができそうだ。もちろん市場なのだから、売り手と買い手があつて、この世界が成立する。結果は、どこへ行つても同じ間取りのマンション、一戸建て。同じ出窓、ウオークインクローゼット、システムキッチン、ユニットバス。同じ外壁、同じ床。同じ外観、そしてそれらがつくりだす同じ風景。もっと言つてしまえば、同じ駅前ロタリー、同じ街路、同じ公園、そしてひとびとの同じ思考回路。こんなひらべつたい世界が世の中を覆いつくす。耐震偽装事件では、デベロッパや建設会社、設計者は加害者であり、それを買ったひととは被害者であることは明白である。それでも、多発性の悪性腫瘍のように、からだ全体の病気が、今の世の中を蝕んでいることが遠因、いやもう少しついででそれこそが大きな原因とは言えないだろうか。

五十年近く前につくられた団地が、当時の若い人々を惹きつけ、いま一代下つた若者たちをひきつける。まっとうな設計者は、目に見えないすなわち取り替えられない部分にお金をかけましようと言つ。仕上げは、またお金ができたらいたいましよう。内装は、生活スタイルに合わせて変えられるように、骨格をきちんとつくりましよう。今では、スケルトン、インフィ、S I構造などと言つたりする。残念な

ことに、その思想は完全には実現されぬうちに、新たなものにおきかえられようとしている。昭和30年代はじめ、終戦から20年あまりの計画である。どんどん豊かになつてゆくまさに急激な変化の時代だつた。そのなかで、建物の耐震基準がかわり、設備機器の性能は飛躍的に向上し、時代にそつて家族の形態も生活のしかたも、コミュニティの存在もすべてかわつた。それでも、この計画はいまでもひとびとをひきつけるだけの、ある種の普遍性をもちえたのだ。

果たして、今、われわれの世代は、そのようなものを世におくり出そうとしているのだろうか。色あせぬものは、誠実につくられたもの、ばかばかしいエネルギーのかかつたもの。すごいもの。何百年もそこにありつづける寺。均質とか、無名性とか、そんなことではナクテ。ここという場所があるコト、いきいきしていること、異なるコト。そんな健全なことを元気に叫べる社会だつたら、ソナナ安いマンションナントオカシイ、と思つんだらうけれども。ひとびとの厳しい目があれば、それは犯罪に対してはもちろんだが、ほんとうの教育にタイシテアリ、文化にタイシテデアリ、己の無知にタイシテデアル、ソナナ目がそこらじゅうにあれば、ロクデモナイ建築は、見向きもされなくなるソノ。そうすれば、そんな建築をつくらうとする建築士もデベロッパも存在シエナイ。コレハ、テロリアル、シ、戦争リアル。世界の平和を願うコトヲ、ドリーマーと呼んで笑ツテハイケナイ。キミが、平和な世界をつくるために、勉強シナイとイケナイのだ。

(篠崎健一)

お金に困らないように

ぶらぶらと何も考えずにインターネットをしていたら何処をどう辿つたのか、とある女性(?)のブログに行き当たつた。何でも彼女は投資を色々しているらしい。投資信託、株式、為替など、ブログは彼女のそんな投資についての情報を日記で語るといった感じ。これは趣味なんだろうか、それとも仕事なんだろうか。そんな疑問が頭によぎりつつも、色々ブログの記事を読んで廻る。別に奇麗事を言う気は更々ないのだが、やっぱりお金をもうける!と言つた物凄くダイレクトなコンセプトに対して僕自身、どうも少し距離を置いてしまつ所がある。それは多分、僕が甘やかされて育つてきた証拠でもあるし、今までに本当に苦労した事がないからだろう。

そんな事を言つていても、やっぱり興味もあるので読んでしまふ。よくよく考えると現金なもので、そう言えば自分は、賞 大賞二〇〇万円!とか言つた漫画、小説、映画などの公募を見れば、おあ!と反応してしまつタイプで、頑張つてみようかなあ、などとよく想像に夢を膨らませていたものである。どんな仕事をしている人だつてお金が払われるからこそ、その仕事をする訳だし、お金を稼ぐ!といった動機には何も悪い事はないような気がする。そこでなければボランティア、もしくは趣味になつてしまふ。

となく軽い違和感を覚えた。改めてそのサイトを見渡してみると、なるほどお金儲けが主題だけに色々な広告が貼つてある。為替証券会社の広告、セミナーの広告など。例えば、インターネット起業で有名な人が書いた本など、彼女が影響を受けた本は日記の中で紹介され、その本が買えるショッピングサイトへのリンクも必ず付いている。それはそのサイトの主題に合つていて理にかなつているし見方によっては親切だ。しかし、どうしてだろう? それでも、さっき覚えた違和感の理由が自分でも良く分からぬ。

取り敢えず、そのリンクを片っ端から覗いてみて驚いた。実に沢山のインターネット起業家達が居る。何だかブームになつていてではないかと思つぐらいに。僕は相当遅れていたらしい。リンクの先は様々で、中には相違いがわしい匂いするもの、そうでないもの、面白いものもあるし、面白くないものもある。どのようにして稼ぐか、儲けるか。基本はビジネス。例えば月に1万を目標にしてインターネットで起業し、人生早めにリタイアしようだとか、会社を辞めて自由を手に入しようだとか、そんな合言葉が飛び交う。経営、起業のコンサルタントだつたり、又は自分の体験談を売つていたり、情報を売つていたり色々。またはそれらの助けをかりて起業した人達など見て行くうちに、この人はこの人となりがあつて、またこの人はこつちのグループと関係が深いのか。など人間関係が見えて来て面白い。信用出来る、出来ない、善し悪しの判断とはまったく別に「こんな世界業界もあるのか」と素直に感心してしまつた。それらのサイトを次々と覗いて行き、更に自分でインターネットとホームページについて調べてみたりしたりしながら大分時間を費やした後でふと我に返つた。バ

(次面に続く)



つつあること i n g

12月18日のブッシュ米大統領による国民向けテレビ演説。翌日の朝日新聞の見出しは、「アメリカは「イラク戦」勝ちつつある」だった。この「～しつつある」というのは、進行形という文法に対応しようとして日本の英語教育者が考え出した新しい日本語だと、昔どこかで読んだことがある。そこで今回は、大統領の演説から進行形のみならず、広く“ing”を用いる表現を拾ってみる。いろいろ前向きに進行中のようだ。(望月) “～ing”は2系統ある。「している系」と「こと系」である。前者は分詞、後者は動名詞と分類されている。

している系

進行形

My fellow citizens, not only can we win the war in Iraq, we are **winning** the war in Iraq.

我が親愛なる国民のみなさん、我々はイラクにおける戦いに勝利できるだけでなく、イラクにおける戦いに**勝利しつつある**のです。

分詞(補語)

We will see the Iraqi military **gaining** strength and confidence, and the democratic process **moving** forward. 我々は、イラク軍が強さと信頼を**獲得しつつあり**、民主化プロセスが**前進しつつある**ところを目撃するでしょう。

分詞(形容詞的)

We know from their communications that they feel a **tightening** noose and fear the rise of a democratic Iraq. 傍受した情報から我々は、彼らが**絞まってゆく**ロープを感じ、民主イラクの勃興を恐れていることを知っているのです。

noose 絞首刑などに使われる締めなわ。

こと系

動名詞

We do not create terrorism by **fighting** the terrorists. We invite terrorism by **ignoring** them.

我々はテロリストたちと**戦うこと**によってテロリズムを作り出してはしません。我々は彼らを**無視すること**によってテロリズムを招いているのです。

I know this war is controversial, yet **being** your president requires **doing** what is right and **accepting** the consequences.

この戦いに賛否があるのは知っています。それでもなお、みなさんの大統領**であること**は、正しいことを**すること**、そしてその結果を**受け入れること**を必要とするのです。

名詞

This election will not mean the end of violence, but it is the **beginning** of something new: constitutional democracy at the heart of the Middle East.

この選挙は暴力の終りを意味するのではありません。しかしそれは新しい何か、中東の心臓部における立憲民主主義、の**始まり**なのです。

(前面から続く)
ソコン画面を長時間見ていたからか、それともお金の毒にでもあたってたのか、大分疲れた。
結局、答えを見つけないとして色々ホムページを見て回ったけれども、分からなかった。違和感の正体。お金を稼ぐ・儲けるという事。考えてみれば、今僕が作っている作品だって売れなければ意味がない。もちろん自分にとっては意味がない訳ではない。けれども、やはり売れる事を望まれて作られたものには変わりがない。お金を得ようとする以上それはビジネス・仕事という事に繋がる。それとは別に、芸術家は一銭にならなくても絵を描き続けるのだ!と叫んだという作業は、お金を稼ぐというプロフェッショナルという意味の仕事とはまた別の、その人

の「人生においての目的」と言っただ意味での仕事という事になる。それでも、その絵を描き続けるためには稼がねばならず、その為に何処かで働いたっていいし、お金儲けの会社を設立したっていいのではないか。例えばそれが、家族と一緒に過ごす為だったり、大好きな釣りをする為でもいいのだ。
辞書を引いてみると「儲ける」利益を思いがけなく得る。得をする「稼ぐ」生業に励む。精出して働く。働いて金を得る。もうける」とあった。個人的にはお金を稼ぐと言う響きの方が好きなのだ。ただ、儲けると言う事が人を騙したりするのでなければ悪い事だとは思わないし、むしろ正直に言えば魅力的な気がする。じゃあ、何だったのだ? いったい何がそんなに引つ掛かっていたのだらう。随分と頭の中でこんがらがってしまっただ。突然。その時、ランダムで流していた音楽が懐かしい曲に変わり、耳に入ってきた。思わず、ふっと身体力が抜けてその曲に聴き入ってしまう。何だかそれは不意に気持ちごと身体をポンと弾き飛ばされたような感覚だった。「ああ、そういう事なんだ!何故だか、泣きたいような気持ちになり、自分が大切にしていたものを思い出した。もしかしたらその違和感、お金に構いすぎると大事な事を簡単に見失ってしまうという恐れだったのか。
結局のところそれはただ、僕が甘ったれていただけと言う事なのかもしれない。それでももう、その違和感が何だったのかは気にならなくなっていた。どちらでもでもいいのだ。そう言う事はきっとこれから僕が自身で経験し、見つけて行くのだらう。We shall be happy. ライ・クーダーのギターが歌う。よし、コーヒーを入れよう。もうすぐ朝が来る。
(神山)



『Mesk Elil』 Souad Massi

AZ、2005年、983 433.5



ワールド・ミュージックという曖昧な括りがある。パンク/ニュー・ウェイヴの道を進んでいくと、自ずと一度は迷い込まずにはいられなかったような時代があった。そのせいで、ワールド・ミュージックという言葉には、評論家が調子に乗って燥いでいた、少々胡散臭い、似非なんとかの匂いを感じてしまう私である。そんな私ではあるけれど、このアルバムを聴いて、これがワールド・ミュージックの一つのゴールなのかもしれない、という気になった。

アルジェリアにルーツを持ちながらフランスで活動するミュージシャンというのはそれほど珍しくはないが、殆どの場

合、そこには文化や思想に対する特別な拘りが強いように思える。オーソドクスな西洋音楽とぶつかり合いながら自己の形を確認するような。アフリカン、アラビアン、などなどという言葉が、時には王冠になり、時には足枷になるような。

ところが、スアド・マシの新作はそんな地平からは飛び出してしまった。彼女は自由に音楽を紡ぐ。自分の音楽をつくるだけ。ルーツを忘れるのではなく、ルーツに拘るのでもなく、あるがままに唄う。音楽ってものは、そうやって始まったはずじゃないか。もう小理屈は要らないよ、ってね。

(全太)

(一面から続く)

と食事に勤しむ彼女に「なな公様よ、幸せでございませうか」と尋ねるも、返事がある訳はない。食後に一言の礼を述べるでもなく、女帝殿は暖かそうな場所に移動して、一仕切り身繕い。その後、一眠り。その姿から拝察する限り、極めて満足そうであり、返事は頂戴できなかつたとはいえ、ささやかな幸せを味わっているのではないかな、と。勿論、これは私の推測に過ぎず、彼女の心中如何なるかは知る由もない。然れども、幸せそうなその姿を眺めることは、私にとってはささやかな幸せであることは紛うことなき事実。

こんな具合に、たかだか冬の或る日の、僅か数時間にも、様々のささやかな幸せを味わうことができた私である。小さな幸せを積み

重ねた私であるからして、君は幸せなのか否かと問われれば、そりゃ、幸せなのだと思えるべきだろうし、実際、そのように答えるだろうと思う。けれども、少々形を変えて、君にとつての幸せとは何かね、と問われた場合、本日のささやかな幸せの種々を列挙するかどうかに関しては疑わしい。自信がない。幸せとは何かなんて尋ねられると、ささやかな幸せは私の心や脳みそからぼろぼろと落ちてしまうのか。そんなことで良いのだろうか。

言葉を玩んでいると限りがないし、「幸せ」「幸せ」と繰り返しているうちに、何だか、どんどん「幸せ」が磨り減って薄っぺらになっていってしまう気がしてならぬ。確かなことなんて何も無いが、私には幸せとは何なのかがよく判らない、ということだけは確かかなように思えてくる。

どうでもいい話だけれど、うめ吉代演に納得のいかなかった私は、性懲りもなく、翌日も末廣亭に赴いた。寒風は翌日も吹き荒んでいた。して、その結果や如何に。ふふふ。私は、到頭、彼女の生の姿を堪能したのである。でしたら、お幸せでございませうね。お幸せですか。そんな声が聞こえてくる。イエス、イエス。勿の論だとも。私は幸せだった……答だ。我が心中ながら覚束なし。

孰れに致しましても、来る年も皆さまに幸多かれと祈念しつつ、二〇〇五年の筆を擱く、私であります。ご機嫌よう。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第七巻(十二号)通巻第八四号、無事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇六年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

サアス

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

サアス